科　　目　　名
日本の文学 **Japanese Literature**

2年　前期　2単位　選択

坂　口　頼　孝

概　　要

歌人として、また多くの古典を書写し今日に伝えた功績で知られる藤原定家。その定家の書いた短い歌論書（短歌の作り方を述べたもの）がある。そこにお手本として103首の短歌が載っている。その中から春・夏・秋・冬を歌い、内容的に魅力があり、語法的にも重要と思われるものを順次取り上げる。

テキストは影印本（筆書き）で変体仮名（現在のかなと違ったもの）も混じっている。その変体仮名が読めるようになることが大きな目標である。必要に応じ仮名遣い・発音の移り変わり・文法を講義する。生の古典に触れ、それを読み解く喜びを感じてもらいたい。

目　　標

変体仮名が読めるようになること。併せて日本語の音の変遷と仮名遣いの問題・和歌の表現技巧を理解し、品詞分解や口語訳の基礎を身に付けること。

授業計画

第１回：導入
　授業の目的・やり方を確認した後、日本語の特徴・古典の読み方について講義する。
第２回：１首目(1)
　平仮名・片仮名の成り立ち・字源について触れた後、１首目（７ページ）の字源を確認する。
第３回：１首目(2)
　１首目の歌のかな表記・漢字かな混じり表記を示し、品詞分解・語意・修辞を説明した後口語訳を完成させる。
第４回：２首目
　２首目（７ページ）の字源を確認し、かな表記・漢字かな混じり表記をさせ、品詞分解・語意・修辞を説明した後口語訳を完成させる。
第５回〜第11回
　３首目（８ページ）・４首目（８ページ）・５首目（11ページ）・６首目（13ページ）・７首目（15ページ）・８首目（16ページ）・９首目（18ページ）の字源を確認し、かな表記・漢字かな混じり表記をさせ、品詞分解・語意・修辞を説明した後口語訳を完成させる。品詞分解・語意・修辞の説明は次第に少なくして行き、学生たちが自ら取り組む（できる）ようにする。
第12回：練習(1)
　７ページから11ページの未習部分の変体仮名を字源に直させる（漢字の部分を書いた用紙を配る）。出来た分を回収し、時間内に出来なかった者は宿題とする。
第13回：練習(2)
　前回の宿題（時間内に出来なかった者）を回収し、チェックする。その間過去の試験問題を配り、解かせる。チェックしたものと前回回収分を名簿順にし、正解を教室後方に６枚ほど置き、答え合わせをさせる。各自答案訂正の上提出するよう伝える。最後に過去の試験問題の解説を行う。
第14回：練習(3)
　定期試験の模擬試験（練習問題）を配る。本番と同じ形式で行う。机間巡視し、出来の良くない学生に対し、奮起を促す。最後に解説をする。
第15回：定期試験

授業方法

１．その日取り上げる一首を指示し、変体仮名を板書する。字の切れ目がどこかを黄色のチョークで示す。
２．「字典かな」を使い、変体仮名の字源を書かせる。難しいものは読みを教える（回数が重なれば、過去出てきた箇所を教える）。
３．すべてできた者には一首を全部平仮名で書かせ、歴史的仮名遣いの誤りの有無を古語辞典で調べさせる。
４．古語辞典を参考に一首を漢字かな交じりで書かせる。
５．古語辞典を参考に品詞分解をさせる。難しい所は説明する。
６．歌の修辞について説明する。
７．古語辞典を参考に口語訳をさせる。

評価方法

定期試験（100点満点）。60点に満たなければ再試験（１回のみ）を実施する。定期試験・再試験は古語辞典（電子辞書）と文法書のみ持込可。時間は60分。

教　　材

教科書：百人一首（尭孝筆）笠間書院（1,000円）…必要
　　字典かな　笠間書院（390円）…必要

履修上の注意

古語辞典（電子辞書の場合、活用表が付いていないものは別に文法書が必要）とノートを必ず持って来ること。ノートは過去の分も持って来ること。